



男は 痛い !

國友万裕

第25回

『彼女がその名を
知らない鳥たち』

1. コネクティング・ザ・ドット

対人援助学会の大会の打ち合わせのために、中村正さんと1年ぶりに温泉に行った。正さんとはここ数年、何度も温泉で話をしている、たっぷり裸の付き合いをともにしていただいている。お互い裸になると近くなった感じがするので、とても親密になった気がして楽しいものだ。考えてみると、正さんと初めてお会いしてから、もう20年近い月日が流れようとしている。最初の頃は、一緒に風呂にまで入るような仲にはなると思っていなかった。

俺がある男性グループに足を踏み入れたのは34歳の時、19年前のことだ。当時はまだジェンダーに関する議論が盛んだった頃で、大阪の男女共同参画センターで、そのグループの分科会が行われて、その時のファシリテーターが正さんだった。俺はそのあと、そのグループに深入りしていくことになるのだが、正さんはDVの分科会、俺はDVの分科会に参加したこともあったけど、メインはメディアのプロジェクトだったので大して親しいわけでもなかった。俺は2年間、べったりプロジェクトを頑張ったのだが、その後、他のメンバーと決裂してしまった。今思えば、俺も悪い、でもあの頃は相手のことが見えなかったのだ。「人間って、べったりし過ぎると相手のことが見えなくなってしまうものなのよ」と以前女性のカウンセラーから言われたことを思い出す。そうなのだ。その人と俺はべったりし過ぎて、お互いを傷つけあうことになってしまっていた。プロジェクトで頑張っていた当時は生涯の師弟関係になれる人かと思っていたのだけれど、愛は突然憎しみへと変

わっていく。その人は俺のことを一生許すことはないだろう。最近になって、学会等で顔は時々見ているが、目線すら合わせることはない。懇親会でも別のテーブルに座る。あそこまでこじれるとお互いに修復の余地はないのだ。それはそれでいいのかもしれない。徹底的に付き合っ、徹底的に憎しみ合う。恋愛だって、そういう終わり方をするときはあるのだから。

その人と決裂してから7年くらいはトラウマ状態が続いた。大阪のそのグループのセンターがあった界限には行くことすらできなかった。俺はその間、京都で当時知り合いになった人たちの催しに時々顔を出していた。そこで正さんにお目にかかることはあったものの、挨拶程度の付き合いだった。

それが親しくなったのはいつ頃からだろうか。6年くらい前から、一緒にお芝居に行ったり、風呂に入ったり、食事に行ったり、共同研究したりと本当に親密になってきた。出会った点から20年近い月日を経て、親密になる点がつながったのだった。

一方で、かつて、同じプロジェクトで頑張っていた女性とは喧嘩したわけでもないのに自然消滅的な関係になってしまった。スポーツクラブで彼女が運動しているのを何度か見かけているのだ。何度かすれ違ったし、彼女は俺のことに気づいているはずだが、至近距離に立っても、彼女は話しかけて来ようとはしない。俺の方もなんとなく話しかけられない。全く見知らぬ人であるかのようにすれ違っている。思えば、もう10年。おそらく、彼女もかつてのことは思い出したくない。あのグループはトラブルも多かったし、忘れてしまいたいのだろう。これはこれでいいのだと

思う。

いつの間にか見知らぬ人になってしまう人、大げんかをして別れる人、思いもよらず親密になる人、人間関係の出会いと別れは様々である。とりあえず、正さんとは出会った点と親密になる点がつながった。ドットがつながったのだ。スティーブ・ジョブズが講演で使った「コネクティング・ザ・ドット」という言葉は有名である。未来のことはわからない。後で振り返って、ドットとドットがつながったことを実感する。人間は運命に左右されているのである。

2. What's a Small World!

「人間って、何が幸いするかわからないわよねー」

俺が2冊目の単著を出した時のことだ。行きつけの自然食レストランの女性からそう言われたものだった。不登校で友達もなく映画ばかり見ていた若い頃、ジェンダーに苦しんで誰にも理解してもらえなくて葛藤していた時代、その時代があってこそ、今となっては映画とジェンダーの本を出せる。確かに、映画とジェンダーに関しては少年の頃の苦しみ年取ってからの研究へと繋がっていったのである。これもコネクティング・ザ・ドットだ。

レストランの彼女とも不思議な縁なのである。彼女のレストランを知ったのは彼女の義弟に当たる人が長野の大学の先生で、ある学会でお会いした時に、「京都に住まれているのならば、ここに行ってあげてくれないか」と頼まれたことからだった。

一旦、行ってみると料理がおいしいだけで

はなく、あちこち俺の知人の人たちと彼女がつながっていることがわかってきた。俺の家の近所のカフェの人、大学の近くの食堂の人、ジェンダーの活動の人、対人援助学会の会員の人、さらには元大学の非常勤講師組合のリーダー的な存在だった女性まで、皆、彼女と友人で交流している。なんと狭い世の中！
What's a small world!! やはり、人との巡り合いは運命である。ドット同士が繋がっているのだ。

3. たどり着いたドット

大学院の修士課程時代の先生に思い切って電話したのは、今から17年前。ちょうどプロジェクトの後、初めての講演依頼が来て、調布市で講演をする頃だったと思う。

この先生には本当にお世話になった。この先生がいなかったら今の俺はない。神様のように優しい先生だった。しかし、一つだけ困っていたのは、この先生は早くに就職したほうがいいという考えであるところだった。俺はこだわりの強い人間なので、どこの大学でもいいという気持ちにはなれない。しかし、大学の状況は年をおうごとに厳しくなっていて、小さな潰れかけの大学であっても早くにポジションを得ないと、一生冷や飯ということになる。その先生はそう思っていたのだ。

連絡を取ったら、またそのことを言われるだろうなあ。そう思って俺は、その先生が退官して、京都に来られなくなってからは電話すらしていなかった。年賀状も出さなくなっていた。ところがある日、突然思いついた。連絡してみようと、あれだけお世話になった

先生なんだから、そのあと、ずっと音沙汰なしでは、あまりにも薄情だ。その先生は、東京在住で週に2日ほど京都に来られていたのだが、もう大学院も定年になって来られなくなっていた。でも、人づてにまだお元気だとは聞いていた。思い切って、電話をすると奥様が出られた。

「先生、まだお元気でいらっしゃるんですか？」

「もうアウトなんです。ハガキかなんかくだされば喜ぶと思います」という返事だった。

先生はまだ亡くならなかったのだが、その時点で80を過ぎていたし、このところ体調が悪くて、もう電話に出られるような状況ではないらしかった。しかし、奥様と話ができたことで、喉に詰まっていたお餅が落ちたような気分だった。早速、ハガキを出した。「就職は決まっていらないけど、元気にやっています」と。

その1ヶ月後、その先生はなくなった。まさに虫の知らせだった。あとでその先生の書かれた冊子が送られてきたのだが、俺が電話した時はもう死を待つ状況だったみたいだ。俺のハガキを見て、安心して、天国に旅立たれたのだろうか。そうだったら嬉しいなあ。

この先生は修士課程時代の恩師なのだが、博士課程時代の恩師とは俺が最初の本を出した後に16年ぶりの再会となった。この先生は論文の指導をしてもらった先生である。考えてみるとあの頃は必死で、電話で1時間くらい引っ張ったこともあった。迷惑だったろうなあ。ビッグネームな先生で、その先生を頼る人は他にも何人もいたし、俺はそれほど親密ではなかった。だんだんと大学への就職状況は厳しくなっていく、俺の大学院時代の

前後だった連中は専任が決まらないまま、やめてしまった人も何人もいた。俺はどうか1冊は自著を出したいと頑張った。どうか出せた頃、その先生ともう一度会いたいと思った。それを知り合いの出版社の人に話したところ、俺とその先生の再会をセッティングしてくれた。日本料理を食べながら、久々にお話した。15年も会っていなくて、その先生はもう80なのだが、ほとんど変わっていらっしやらなかった。俺の本を渡し、握手して帰った。

あの頃は恐れ多くて付き合えなかったが、今となっては付き合える。この先生との出会いもこれで結果オーライとなった。ドットとドットがたどり着いたのだった。

4. メロンさんが死んだ。

11月の初旬、母に電話した。

「今日はメロンさん（仮名）のところに行ってきたのよ。新聞に100歳で亡くなったという記事が出ていて、娘さんがいらっしやるから、そこまで行ってきたの」と母。

僕の実家は商家だったのだが、メロンさんは僕のところで働いていたお婆さんだった。実名を出すわけにはいかないの、メロンさんという仮名にしたのは、この人、僕が大学の頃にメロンをいっぱい京都に送ってくれたのだった。

もうとっくに亡くなっていると思っていたら、100歳まで生きられて、49日が終わったばかりなのだそう。娘さんが、「万ちゃん、万ちゃんと話していて、あなたの子供の頃の写真をたくさん見せてくれたわよ」と母。

へー。知らないところで俺のことを思っ

てくれた人がいたのだった。もううちの仕事を辞めてから、30年以上も経っているから、とっくに俺のことなんか忘れていたと思ってた。そうじゃなかったのだった。娘さんまで俺の名前を口にすることは家で相当話していたのだろう。

俺はやはり幸せなんだなあーと思った。

俺は、嫌われたり、憎まれたり、白眼視されたりしたときのことばかりを覚えているけど、実際には愛してくれた人もたくさんいたのだった。俺と愛のドットでつながっている人はたくさんいるのだ。

5. 共有できない思い出

先日、韓国語の先生と話した。韓国といえど、何と言っても軍隊のイメージがある。

3年ほど前に教え子と食事に行った時のことだ。その子は大学在学中スポーツクラブでバイトをしていて、高校時代はラグビー部だったと聞いている。「僕の人生はスポーツの人生なんですよ」と語っていた。その彼が、「韓国に生まれなくてよかった。軍隊に行かなくて済むから」と突然、言い出したのだった。彼みたいなスポーツマンだったら、体力的には十分、軍隊についていけるだろうし、男の世界にも慣れているはずだ。その彼であっても、軍隊なんかには行きたくないのだなあと思って、ホッとした。

韓国の場合は、男は皆兵役につかなくてはならない。しかも、良心的兵役拒否がないので、拒否したら刑務所行きである。その先生の話だと、実際に刑務所に入れられる人もいるとのことで、「刑務所の方がマシですよ」とおっしゃっていた。そういえば、前に韓国か

らの留学生の男子と話した時も、軍隊にいた時は上官の人を殺してやりたいくらいだったと話していた。それくらい軍隊はつらいのだ。男だけがこんなつらい目に合わされるなんて、俺は絶対に許せない。これは深刻な男性差別なのだが、韓国の男性たちはそれを受け入れているのだろうか。

そのことを尋ねると、刑務所の方がマシなんだけど、行かなかったら「そのあとの人生で、体験を共有できなくなるんですよ」とその先生はおっしゃっていた。すなわち、同じ過去を共有していないため、男の仲間に入れなくなるのだ。

俺の場合は、高校に行かれなかった。大概の人は高校には行くから、行かなかったことが、共有できる過去がないという孤独につながっている。俺は履歴書を書くのが辛い、修学旅行の高校生を見るのが辛い、高校の頃スポーツをやっていた人の思い出話を聞くのが辛い。俺はあの時、一人の殻に閉じこもっていて、同年代の人たちと話をすることすらなかったのだった。

俺にとってまさに学校は軍隊だった。殴られることの恐怖に怯え、上半身裸を強制され、髪は短くしろと言われ、理不尽な校則に縛られる管理教育の世界であった。だから、不登校になったのだが、他の男たちはどうにかやり過ごしてきているから、俺みたいな男を理解してはくれない。この十字架をずっと背負う苦悩は並大抵ではなかった。学校は刑務所以上に地獄であっても、続かなかった人間はそのツケを払わされるのだ。軍隊に行かなかった韓国の男たちが払うツケと同じツケを。

6.つながるドット

50 を過ぎて、ドットはどんどん繋がってはいない。俺は若い頃、親不孝をしまくった。弟にも迷惑をかけた。母は散々苦労したが、60 を過ぎる頃から人生が開けて、世界中を旅した。今は 80 近いが元気にしている。俺は、若い頃は親や兄弟のことを考える心のゆとりなんかなかったが、今はゆとりができてきて、親孝行もしている。今一番願っていることは母が幸せに一生を終えてくれることだ。そして、弟が良き伴侶に巡り会えることである。俺は母や弟の幸せの邪魔になることだけはしたくない。こういう自分になれたのも、これまでの紆余曲折があったからで、これもコネクティング・ドットだ。

皆が学校に行っている時に友達もなく過ごした時間は、今になって、教え子たちが埋めてくれている。俺は大学くらいの頃焦っていた。今、海や山で遊ばなかったら、スポーツをしなかったら、一生、そういう時期を過ごすこともなく一生を終えることになるのだと。しかし、そうはならなかった。俺は 21 の時にプールに通い始めて、53 歳になった今日まで、32 年間プールもしくはジムのない生活をしたことがない。大概の人は一時期は入会しても、何かきっかけがあると辞めていく。しかし、俺は子供の頃スポーツができなかった悔しさがあるから、今でも辞めずに続けている。

また、この原稿を書いている 3 日後には専門学校で教えていた男の子と飯に行くことになっている。彼と会うのは 3 回目だ。1 回目はプールの後、飯。2 回目は飯の後、風呂。今回は飯だけになるのか、風呂も行くことになるのかわからないが、とにかく彼は俺と会いたがってくれている。ラインで、行きたい

と彼の方から誘ってきた。俺はもう2度も付き合ったし、もう彼の方が嫌がると思っていたのに、彼の方からまた行きたいというのだ。こんな喜びはない。

彼は学生時代はスポーツクラブのインストラクターをやっている、クラスで一番のマッショクんだった。その彼と風呂やプールに入れる。俺はこういうやつと友達になりたいという気持ちは小学校の頃からあったのだけど、スポーツがからっきしできなかつたため、すべての男性的な活動から身を引くより他なかつた。でも今はスポーツ万能で体躯の立派な彼と友人なのである。

若い頃に得られなかつたものは、思わぬ形で運命が与えてくれる。これも一種のコネクティング・ザ・ドットだろう。

6. 『彼女がその名を知らない鳥たち』 (白石和彌監督・2017)

まだつながっていないドットがある。それはやはり女性恐怖だろう。俺は本当に女性を憎まざるをえない運命を背負って生まれたらしい。今でも俺は女性を批判の目で見るという習慣がついてしまっている。先日の対人援助学会の大会に九州の女性が来られていて、彼女にその気持ちをぶつけた。彼女も、確かに九州の女性は炭鉱の女性のように荒々しくて、一見、男尊女卑社会に見えても、実際には女が男を泳がせているんだということには共感してくれた。

世の中の男は健気だ。女のために一生懸命働いて稼いで、家に帰ると妻と子供が癒着していて、男は片隅に追いやられる。離婚なんてことになったら、女性の方に問題があつた

にしても、子供は女性に取られる。なぜ、皆、こんな人生を受け入れてしまうのか。

俺は沢山の女性からトラウマを負わされたせいで、女に無償の愛を与えたいという気持ちがなくなってしまう。むしろ、一方的に尽くしてくれるのであれば女性を受け入れても構わないという心理になってしまっている。これを言うと男尊女卑的な昔風の男の言い草みたいに聞こえるだろうが、そうではないのだ。逆である。むしろ、俺は、今まで女性に傷つけられてきたから、そのお詫びを女性たちに求めているのである。こういう考えでは、いつまでたっても女性と建設的な関係を持つことはできない。俺はこのまま女性と付き合わずに一生を終えるのだろうか。いつか思わぬ形でドットがつながる日が来るのだろうか。

今回のこの映画、俺とはまるで正反対の男の話である。大して期待してはいなかったのだが、予想外の感動だった。阿部サダヲが好演で、いじらしいくらいに一人の女を愛し抜く男を演じている。蒼井優が演じる女は身勝手に浮気者。彼を傷つけるようなことを言いまくる。しかし、彼はめげずに愛し抜く。そして、彼女の人生の後始末を自分が引き受けることで、自分の人生を全うするのである。

切ないなあー。こんな男、悲しいなあーと思いつつ、涙が出そうになった。やはり、愛されるよりも愛する力を持つ男は気高いものがある。ちょっとはこういう男を見習わなくてはならないのかもしれないけれど、俺はやはりこういう男にはなれない。

もう30年近く前の話で恐縮なのだが、郷ひろみと二谷友里恵が結婚していた頃、二谷が『愛される理由』という本を出して、大ベス

トセラになったのだが、この本、元々彼女は『愛する理由』というタイトルで書いたのだと聞いている。それを出版社が女性に受けることを狙って、『愛される理由』に変えてしまったのだった。

俺の方が愛してしまったら、女性に愛を与えてしまったら、それこそ俺は男性ジェンダーを引き受けたことになる。女性の望む男の役割を引き受けることになる。悲しいかな、それが俺にはできないのだ。俺のジェンダー拒否病は深し。

『彼女がその名を知らない鳥たち』、文字通り、男は痛い！映画です。ぜひ、ご覧ください。